HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Well-being and Religion in Hong Kong : From the Perspectives of Welfare, Social Capital, and Subjective Well-being [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	NG, KA SHING
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第12383号
Issue Date	2016-09-26
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/63445
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Ng_Ka_Shing_abstract.pdf (論文内容の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　氏名：　NG KA SHING　（伍嘉誠）

学位論文題名

Well-being and Religion in Hong Kong: From the Perspectives of Welfare, Social Capital, and Subjective Well-being

（香港におけるウェルビーイングと宗教—福祉、ソーシャル・キャピタル、主観的幸福感の視点から）

本論文は、少子高齢化が深刻化している香港を対象に人々のウェルビーイングと宗教との関係を論じるものである。

伍嘉誠氏は、ウェルビーイングの理論と調査方法論に基づいて、ウェルビーイングと宗教との関係を宗教団体によるソーシャル・サポート、ソーシャル・キャピタルの形成、主観的幸福感の増進という三つの機能に着目し、宗教団体やコミュニティの事例研究、世界価値観調査データを用いた計量分析を行い、香港社会において宗教が人々のウェルビーイングに対してどのような働きをなしているのかを考察した。

調査対象地域の香港は日本、韓国、台湾などの東アジア地域とともに、少子高齢化に直面しており、高齢者扶養の福祉制度や家族的対応が重要な課題になっている。英国領として経済発展を遂げた後、中国に返還された香港では、社会福祉の制度的充実に香港行政府が力を注がなかったために、キリスト教会と関連の福祉団体・NPO 組織が福祉の主要なアクターになってきた。経済成長が停滞し、社会保障の制度的充実が頓挫し、福祉多元主義が進行する東アジアにおいて、香港を事例とすることで、急速な少子高齢化に対応できない社会保障、東アジアにおける社会福祉の将来像を展望できる可能性がある。

以下が各章の概要である。

1 章では、従来のウェルビーイング研究の経済学、心理学、社会学の理論が紹介され、宗教社会学の視点からウェルビーイングにアプローチする意義が検討される。次いで、Veenhoven のウェルビーイングの分類法（livability、life-ability、utility of life、appreciation of life）に基づいて、宗教とウェルビーイングの関係を livability、life-ability、appreciation of life の三点から考察する理由について説明している。次いで、研究方法として多角的アプローチ（量的・質的研究方法の組み合わせ）、資料（World Value Surveys 2013、NGO への面接調査、政府統計と文献）が説明される。

2 章と 3 章は、マクロ的な分析である。2 章では、福祉レジーム論、東アジア福祉モデルを略述し、香港、日本、台湾、韓国の福祉制度・理念（儒教文化の影響、欧米に比べ政府の福祉支出が低い、家族扶養の伝統など）と発展について述べられる。その後、東アジア

の福祉モデルは、少子高齢化による福祉支出の増加、個人化による家族扶養の伝統の衰退（一人暮らし、夫婦のみ家族の増加）などの社会変動による影響を受けていることを各政府の統計よって分析する。ますます増加する高齢者福祉のニーズに対応するために、宗教の福祉機能が増加すると予想されることが示唆される。

3 章では、歴史的資料、NGO への面接調査、政府統計と文献に基づいて初期イギリス植民時代（1842－1941）、二次世界大戦と日本統治時代（1941－1945）、戦後の香港社会における人口急増（1945－1960）、経済発展による格差と社会不安：スターフェリー暴動と６７暴動、福祉制度の本格的な展開（1970～）の５つの時期に分けて、香港の社会福祉における宗教の役割について考察している。また、現在社会福祉を行う宗教団体（香港仏教連合会、香港道教連合会、嗇色園と円玄学院、カリタス香港、香港クリスチャン・サービスなど）の発展や福祉サービスについて分析されている。以上の分析によって、香港は植民地時代から現在まで、社会福祉において宗教団体、特にキリスト教会が大きな役割を果たしていることが明らかとなる。

4 章と 5 章はメゾレベルの考察である。4 章では、五つの高齢者コミュニティの事例によって宗教とソーシャル・キャピタルの形成について考察している。キリスト教会と一貫道仏堂での参与観察、宗教活動に参加しているキリスト教の高齢信者 10 名と一貫道の高齢信者 12 名へのインタビュー調査によって、信者は同じ信仰と世界観に基づいた家族のような強い絆で繋がっていることを明らかにした。そしてその信仰に基づいた「家族的感情」が信頼・互酬性の基盤となっており、信仰が提供する利他的文化（隣人愛、功徳など）が高齢者のボランティア活動の参加と援助行為を促進すると考えられるとされている。一方で、世俗団体である老人センター、高齢者向けサークル（歌謡、ダンス）は、高齢者の趣味活動を促進できる空間を提供しているが、共通した強いアイデンティティや道徳的制約が弱いため、ネットワーク、信頼、互酬性の形成の面で限界があるとされる。このように、宗教が提供するコミュニティや社会参加機会は、高齢化に伴い減少していくネットワークを補足できると考えられるのである。

5 章では、「楽動の友」と「寧安計画」という二つの高齢者サポートプログラムの事例を取り上げる。「楽動の友」はアクティブな退職後生活を促進するプログラムであり、キリスト教系福祉団体である香港クリスチャン・サービスはこのプログラムの支援団体として、活動の場所、アドバイス、情報などを提供している。「寧安計画」は、同じくキリスト教系福祉団体であるカリタス香港によって提供されている高齢者に葬式のサポートを提供するプログラムである。参加者は、家族から援助をもらえない一人暮らしや夫婦のみ家族、低収入の人が多く、家庭訪問、集会、社交活動なども行なわれる。この二つの事例から見ると、キリスト教系組織は高齢者の社交やソーシャル・サポートを支援するプログラムを積極的に行っていることがわかる。

6 章と 7 章はミクロレベルの考察である。6 章では、個人レベルにおいて、宗教と香港の高齢者の主観的ウェルビーイングとの関係を考察するため、キリスト教徒高齢信者と一貫

道信者の高齢信者へのインタビューに基づいて、ナラティブ分析を行っている。体験的ウェルビーイングとしては、信仰が提供する三つの要素、つまり、「死後の世界が約束されていること」、「神仏からの守護」、「対処メカニズム」、が脆弱である高齢者（死への恐怖、生活に対する不安など）にとって希望、安心感、肯定的な意味で資源となっている。また、心理的ウェルビーイングとしては、宗教に参加することによって、「宗教知識の学習」、「ほかの人を助けること」、「教団の活動、行政、儀式を手伝うこと」ができるため、それらは高齢者にとって個人成長・人生の新しい意義に繋がっている。

7 章では、世界価値観調査（2013）のデータを用いて、香港社会において、宗教変数と生活満足度の関係を分析している。社会経済属性を統制した後に、「神様を重要に思うこと」と「教団での活躍度」が生活満足感に正の相関を示している。また、性別、年齢、収入、健康という社会経済属性は生活満足感の説明要因であるが、宗教変数の効果は有意であることを示している。

終章では、本論文の問題意識と理論的枠組み、各章の知見をまとめなおしている。